

1. オリエンテーション、導入——聖書と聖書学・考古学
- 2～7. 旧約聖書——宗教史的背景、創造、契約、王権、預言、知恵
8. 新約聖書1——新約聖書学
9. 新約聖書2——神の国
10. 新約聖書3——イエスの譬え
11. 新約聖書4——富
12. 新約聖書5——国家
13. 新約聖書6——グノーシス 7/15
14. 受講者による研究発表 7/22
15. フィードバック 7/29

<前回>

## **12. 新約聖書5——国家**

### **(1) キリスト教と国家**

1. 単一の国家論を導き出すことはできない。古代：迫害から国教化、敵対から協調  
キリスト教は事実上、あらゆる形態の政治体制下で存在してきた。
2. 国家、教会、神の国の三者関係

### **(2) 新約聖書の国家論**

3. イエス：論争における国家への言及 → 多様な解釈が可能、政教分離？
4. ヨハネ黙示録：迫害下の教会 → 国家との敵対関係
5. パウロの意義：市民社会のキリスト教、国教化以降の状況との合致

### **(3) ローマ帝国の迫害のキリスト教**

6. 迫害下のキリスト教（1～3世紀）：この間にキリスト教の原型が完成した。
7. ユダヤ教から継承したもの：
  - 1) 終末思想：善悪の最終的決着の時・罪の問題の最終的解決＝歴史（創造から終末）の完成 → 神との完全な関係の実現・本来的な人間性、正義の実現
  - 2) 黙示的終末論：宇宙的ヴィジョン→ 罪と悪に対する勝利、ハルマゲドン
8. 迫害・抵抗文学 → 象徴、暗号
9. ローマの平和か、神の平和か（二者択一）  
ローマの平和（Pax Romana）：政治と経済による上からの支配、そのもとでの秩序＝平和。→ 民族的伝統・文化の解体と環境破壊

### **(4) 公認・国教化の意義**

12. 政治的秩序と宗教的秩序の相補性  
天上の秩序と地上の秩序、天の統一と地の統一（上と下との照応性、照応の論理）
13. 政治的要請としての「正統一異端」論争  
宗教的要因との関連性の問題  
多様性を保持しつつ、異端との対応で徐々に正統教会へ
14. 三位一体論の意義  
・国教会＝正統教会の基盤となる教理→その後のキリスト教世界の基礎  
・独裁的絶対的な神理解への批判契機（モルトマン）、多様性の保持

### **(5) 国教化の帰結**

15. 国家神学・政治神学としてのキリスト教神学  
「神学」：キリスト教の発明ではない。古代ギリシャ起源。  
ストア哲学の神学区分（アウグスティヌス）：  
民衆の神学（神話） 国家の神学（ポリスの国家儀礼） 自然の神学（哲学）
16. 「国家の神学」を組み込むことによって、キリスト教神学の成立過程は完了した。  
↓  
政治神学（シュミット）
17. 絶対平和主義（軍隊の宗教性）から正戦論（アウグスティヌス）へ、そして聖戦論へ。

キリスト教の国教化は、国家に対する教会の関わりについて再考を迫ることになる。

パウロの国家論の意義 (宮田光雄)

#### 18. アウグスティヌスの「神の国」論

#### 19. 現代の問題：キリスト教と公共性

国教会体制後の政治的状況で、なおも、正戦論にとどまるのか。

国民国家・民族主義を超えた普遍性の実現を試みるのか。

↓

下からの公共性、ネットワークとしての公共性

### **13. 新約聖書 6 ——グノーシス**

#### (1) 古代地中海世界の宗教的状況とグノーシス主義

##### 1. 古代の思想運動・宗教運動としてのグノーシス

二世紀から四世紀頃にかけて、正統キリスト教会と競合関係にあった宗教運動 (キリスト教内あるいは外、異端あるいは異教) の総称 (単一の運動体ではない。多様の神話体系)。エリート主義的傾向の「グノーシス」(認識、知識→高次の真の知恵) を探求する古代に広範に見られる精神動向の一翼を担う。正統キリスト教 (パウロ) もこの動向と緊密な関係にある。

2. 「1:19 「わたしは知恵ある者の知恵を滅ぼし、／賢い者の賢さを意味のないものにする。」 20 知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。21 世は自分の知恵で神を知ることができませんでした。それは神の知恵にかなっていません。そこで神は、宣教という愚かな手段によって信じる者を救おうと、お考えになったのです。・・・2:6 しかし、わたしたちは、信仰に成熟した人たちの間では知恵を語ります。それはこの世の知恵ではなく、また、この世の滅びゆく支配者たちの知恵でもありません。7 わたしたちが語るのは、隠されていた、神秘としての神の知恵であり、神がわたしたちに栄光を与えるために、世界の始まる前から定めておられたものです。8 この世の支配者たちはだれ一人、この知恵を理解しませんでした。もし理解していたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」(I コリ)

##### 3. 年代：

I コリヤコロサイ (「2:8 人間の言い伝えにすぎない哲学、つまり、むなしいだまし事によって人のとりこにされないように気をつけなさい。それは、世を支配する霊に従っており、キリストに従うものではありません。」) → 1世紀に後に正統キリスト教会と対抗する運動体としての「グノーシス」の存在を遡及させることは適切ではない。

「われわれが次に考察しようとする運動の前史」(マルクシー、98)

「「認識」に関する統一的な理解は二世紀のはじめのキリスト者の間では存在しなかったのである」(20)、「二世紀末になると「認識者」を自称する多くのキリスト教の集団を数えることが可能になる」(24)

「I コリントにおけるパウロの論敵の思想は「グノーシス的」傾向を若干有してはいたが、未だ「グノーシス主義」となるには至っていない。」(荒井、1986、179)

##### 4. 起源 (マルクシーより)

「「グノーシス」の核心として何か非キリスト教的な神話、所謂「救済された救済者」の神話があったというグノーシス研究の中心的理論が崩壊した」(44)

「「グノーシス」は元来キリスト教以前の運動であったが」「キリスト者であることを要求する人びとによって形成されたもの」(基本的に異端) / 「最初からキリスト教外の、非キリスト教的な運動であって、たまたま一定期間キリスト教に順応したもの」(基本的

に異教。ユダヤ教起源のグノーシス・ユダヤ教グノーシスを含む)

「一つの宗教」／「古代の哲学の基準へと方向づけられた、ユダヤ・キリスト教的宗教をいっそうよく理解しようとする試み」

「グノーシス」とは明らかに古代の教養都市の中でキリスト教を時代の水準において説明しようとする相当教養ある人びとの試みから成立した。そのさい、ユダヤ・ヘレニズムの思想家が受容していたものを同時代の通俗哲学から彼らは引き継いだ。」(112)

初期形態／大規模な体系化 (二世紀後半と三世紀前半) ／頂点にして終点 (マニ教)

バシリデス ヴァレンティノス (二世紀半ば) とヴァレンティノス派

プトレマイオス

ヘラクレオン

バルベロ・グローシス派

マルキオン

#### 5. 展開・広がり (大貫隆(1999)によるまとめ、墮落神話について)

「人間の真の自己の隠喩としての「光」、その対立原理としての「闇」をそもそも初めから設定し、互いに対立させると同時に、二つの原理が混合し合う事件を考える型」→「イラン・マニ教型」「東方型」

「光」そのものの中に一つの「破れ」が発生し、それが原因になって、やがて「闇」の領域に造物神が生成し、さらには彼によって目に見える宇宙万物が創造され、その中に人間が「心魂」と肉体から成るものとして創造された」→「シリア・エジプト型」「西方型」

(18)

#### 6. 普遍的な精神類型としてのグノーシス

・「グノーシス主義は古代末期から近代に至るまで、地中海およびヨーロッパ文化の実にさまざまな領域、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教という歴史的世界宗教、神学、哲学、神秘主義思想、科学史などの領域において、表の文化に対する裏の文化として見え隠れしながら、連綿と影響を及ぼし続けた」「西欧における啓蒙主義と合理主義の成立も「グノーシス主義の痕跡」を最終的に越えようとする試みであったという見方」「近現代の世界文学、深層心理学、現代哲学、表象文化、ジェンダー論、世界規模の新霊性運動」(大貫、1999、305)

・ユング派の深層心理学→「悪」の問題をめぐって、グノーシス主義に注目(湯浅、宮下)。

#### 7. 概念規定に関連して(用語の混乱に対して、合意形成の試み)

・「1966年4月、イタリアのメッシーナ大学において、「グノーシス主義の起源に関する国際コロキウム」「グノーシス主義の定義によせて」と題する報告」(荒井、1971、337)

「われわれは、グノーシス主義におけるこのような原理的側面を、歴史現象としての「グノーシス主義(Gnosticism)と区別して、「原グノーシス主義」(Proto-Gnosticism)と呼ぶことに意見が一致した」(346)

「グノーシス主義はそれに固有な *Daseinshaltung* に基づく創作神話を伴うが、その本質は次のような三つのモチーフによって形成されている。(1)究極的存在と人間の本来的自己は本質において一つであるという救済の認識、(2)その前提としての反宇宙的二元論、(3)その結果として要請される、「自己」の啓示者あるいは救済者」(350)

・マルクシーアの「グノーシス」類型論的モデル(34-35)

「以下でわれわれは「グノーシス」を次のような運動のことと理解する」(34)

1. 彼岸の遠い至高の神。

2. 神的諸像の導入、遠い至高の神よりも人間に近い諸像への分裂。
3. 世界と物質についての悪しき被造物としての評価。
4. 自らの創造神あるいは守護神の導入。デミウルゴス。
5. 神的要素がある階級の人間内部で神的火花として眠っているが、そこから解放されるという神話的ドラマ。
6. 上位の領域から降り、そして昇る彼岸の救済者像を通してのみ獲得できる認識（グノーシス）。
7. 神は人間の中にあるという人間の認識を通じた救済。
8. 神概念や精神と物質との対立、人間論において表現される、さまざまに形成された二元論。

↓

墮落神話＋救済神話

## (2) 古代キリスト教とグノーシス主義

### 8. 資料について (マルクシーヌ、47-90)

- ・ オリジナルなテキストを伝えるグノーシス批判の教父
  - エイレナイオス (二世紀末)、アレクサンドリアのクレメンス (215年までに没)、ヒッポリトス (二世紀後半から三世紀前半)、オリゲネス (三世紀中頃より以前)、エピファニウス (四世紀後半)
- ・ 異端報告を行っているグノーシス批判の教父
  - ユスティヌス (二世紀中頃)、テルトゥリアヌス (160-220)、シリアのエフライム (306-373)、アウグスティヌス (354-430)
- ・ グノーシスのオリジナル資料：特に、ナグ・ハマディ写本 (その一部がユング写本、コプト語)、トゥルフアン出土のマニ教文書など。
- ・ 非グノーシス資料：ヘルメス文書、ヘーハーロート文学

### 9. ナグ・ハマディ文書発見の意義

1945/46年に、上エジプトのハムラ・ドム付近の洞窟の一つから陶器の瓶に入ったパピルス群 (52文書を収めた13写本) を発見。最も近い集落がナグ・ハマディ。

多様な文学類型：「トマス福音書」「フィリポ福音書」(語録福音書、Q)、「真理の福音書」、「ヤコブのアポクリフォン」、「ペトロと12使徒の行伝」、「パウロの黙示録」など。

### 10. 正統キリスト教との競合・最大のライバル、キリスト教との共通性

- ・ パレスチナからヘレニズム大都市へ

「ローマ、アレクサンドリア、アンティオキアといった古代の大都市」

Stark (2006) によれば、Rome (450,000)、Alexandria (250,000)、Antioch (100,000)

・ 「二世紀後半から三世紀前半にかけて、キリスト教はその授業を専門化させ、ちょうど通俗哲学の水準を上回る哲学の領域で一般的であったように、秩序だった授業計画と生徒と教師の共通した授業をもった安定した学校を形成するように努力していた」(146)、「「認識者」の小さな集団としてカリスマをもった自由な教師のまわりにあつまった。・・・この人びとはキリスト教神学が総体的に二世紀に立っていた水準にあって、三世紀の本質的な専門化傾向をともにすることはなかった。」(147)

・ 「宗教市場において教養高い同時代人にキリスト教とその特有の世界観の便益を理解できるものとし、こうしてキリスト教を競争力のあるものとしようとする試み」「習得可能な範囲で聖書文献学や哲学的議論のような同時代の学問的方法をもちいて、時代の宗教的な大問題に向けてキリスト教的な解答を与える努力」「多くの教養人の意見に従って欠落していると考えられる部分について聖書物語を完成させる神話を語ろうとする試み」(155)

「二世紀という時代はある種の実験室」「帝国の多様な片隅において才能豊かな諸個人によって、どのようにすれば古代の世界観市場に競争力のあるキリスト教神学に到達できるかについて、いわば実験が行われたのであった。われわれがここで「グノーシス」に数えてきた者だけでなく、多くの神学者が通俗のプラトン主義思想を使って実験をした。」(156)

- ・都市的環境、弁証的意図とその手段（通俗哲学と神話形成）
- ・キリスト教会が正統教会に収斂するプロセス＝グノーシスが異端として排除されるプロセス（論争的意図）

↓

## 12. 反グノーシス主義の教父

論争の中の教理形成

## 13. 争点、神話と歴史

- ・歴史的事実としてのイエスの意義と歴史的事実としての十字架・復活  
キリスト仮現論、そしてグノーシスの多様な神話体系において、歴史的イエスの人格はもはや場を持たなくなる。
- ・創造の善性、神の唯一性（二元論に対する一元論）

### （3）現代的課題としてのグノーシス

14. ユング心理学とグノーシス研究、そしてその意義
15. 現代の異教としてのグノーシス・タイプの新宗教

#### <参考文献>

1. C. マルクシーヌ『グノーシス』教文館。
2. 筒井賢治『グノーシス——古代キリスト教の<異端思想>』講談社選書メチエ。
3. 大貫隆訳・著『グノーシス神話』岩波書店。
4. 大貫隆『グノーシスと「妬み」の政治学』岩波書店。
5. 荒井献『原始キリスト教とグノーシス主義』『新約聖書とグノーシス主義』岩波書店。
6. 湯浅泰雄『ユングとキリスト教』『ユングとヨーロッパ精神』人文書院。
7. 荒井献・大貫隆編『ナグ・ハマディ文書Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ』岩波書店。
8. 柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房。
9. ハンス・ヨナス『グノーシスの宗教——異邦の神の福音とキリスト教の端緒』人文書院。
10. Rodney Stark, *Cities of God. The real Story of How Christianity Became an Urban Movement and Conquered Rome*, HarperOne, 2006.
11. 櫻井義秀・中西尋子『統一教会——日本戦教の戦略と韓日祝福』北海道大学出版会、2010年。